

2025 年 8 月 27 日発行(25-1 号)

一般社団法人日本社会福祉学会

中国・四国地域ブロック会報

発行者: 中国・四国地域ブロック担当理事
石井洗二(四国学院大学)

編集委員: 片岡信之(四国学院大学)
村岡則子(聖カタリナ大学)

事務局長: 岡崎利治(関西福祉大学)

事務局: 四国学院大学
香川県善通寺市文京町 3-2-1

ホームページ: <https://www.jssw.jp/district/chugoku-sikoku/>

目次

I. 巻頭言	- 2 -
II. 2025 年度地域ブロック大会 (第 56 回愛媛大会) の報告	- 3 -
III. 中国・四国地域ブロック特別研究について (ご報告)	- 4 -
IV. リレーエッセイ 出会いと学び、しあわせな地域づくりをめざす「つながりミッケ」の活動紹介	- 4 -
V. 機関誌投稿原稿募集のお知らせ	- 6 -

I. 巻頭言

菱ヶ江恵子（山口県立大学）

新型コロナウイルス感染症の流行以降、会議や教育の現場における ICT 技術の活用は一層加速しました。今夏も、各大学で社会福祉を学ぶ学生たちは、さまざまな実習施設・機関で実習に励んでいます。本学では 2023 年度の夏の実習から、大学・実習施設・実習生の三者が円滑に連携できるよう「実習支援システム」（以下、システム）を全面的に導入し、実習指導に活用しています。

本稿では、このシステムの導入による実習教育への影響について紹介するとともに、講義科目における ICT 活用の可能性についても考えてみたいと思います。

まず、実習生はこのシステムを通じて、実習日誌や各種課題（本学ではアセスメントシートや支援計画の作成など）を随時入力し、それに対して大学教員や実習指導者がリアルタイムで確認・フィードバックを行うことが可能となりました。巡回指導の際には対面での面談も行いますが、実習生が日誌作成や課題の進め方について不安や疑問を抱いた際には、研究室にしながらシステム上のメール機能などを活用し、タイムリーに助言を行うことができます。これにより、より即応的かつきめ細かな教育的支援が実現されています。

また、大学と実習施設・機関との間の連絡事項もシステム上で共有することができ、教員が研究室に不在の場合でもスムーズな対応が可能となりました。実習生の情報や提出物がシステム内に紐づいているため、担当教員と実習指導者が同じ情報を参照しながら連携できる点も、指導体制の強化につながっています。こうした連携のしやすさは、実習指導者にとっても安心感をもたらしているのではないかと考えられます。

一方で、システムを利用するためにはインターネット環境が必要であること、また実習生自身が ID やパスワードを適切に管理するリテラシーをもつ必要があるといった留意点もあります。しかしながら、こうした点を踏まえたうえでも、システムを活用することでより質の高い実習指導が可能となっており、ICT 技術の導入は実習教育の充実に大きく寄与していると感じています。今後も ICT の力を活かし、実習の場がより豊かで実りあるものとなるよう、引き続き取り組んでまいります。

また、実習教育のみならず、講義科目においても ICT を活用した学びの環境づくりが一層求められると考えられます。特に、授業資料のデジタル提供や、双方向性をもたせたオンラインツールの導入など、いわゆる「デジタルネイティブ」世代の学生が主体的に学びやすい仕組みを整えることが重要ではないでしょうか。学習成果と学習意欲の双方を高める教育実践を実現するためには、学生へのフィードバックなど、インタラクティブな要素を取り入れた柔軟な学習支援のあり方について、ICT の活用も含めて講義設計の際に検討することが重要になると考えられます。

学会員の先生方におかれましても、授業や実習における ICT 活用の工夫や実践、そこで得られた成果や課題などについて、ご意見やご助言をいただける機会がありましたら幸いです。

Ⅱ. 2025 年度地域ブロック大会（第 56 回愛媛大会）の報告

日本社会福祉学会 中国・四国地域ブロック 第 56 回愛媛大会
第 56 回大会実行委員長 村岡則子(聖カタリナ大学)

2025 年 7 月 12 日(土)、「現代社会の孤独と孤立ー社会福祉実践におけるつながりの醸成ー」をテーマとして第 56 回愛媛大会を聖カタリナ大学で開催しました。当日は、県内外より学会員 39 名、非会員 96 名(一般 32 名、大学院生・大学生 64 名)の計 135 名の方々にご参加いただきました。

大会は、内閣府孤独・孤立対策推進室の古居直高氏による基調講演から始まりました。古居氏には、孤独・孤立の現状と「孤独・孤立対策推進法」についてご講演いただき、対策を推進する上で重要な 3 つの視点をご提示いただきました。

1. 社会のあらゆる分野における対応:福祉分野にとどまらず社会全体の課題として捉える視点。
2. 「予防」の重要性:問題発生を未然に防ぐ「予防」を重視する視点。
3. 多様な参画と連携・協働:官民の水平的な連携・協働を促進し、民間の主体を多元化する視点。

また、講演の中では、多分野・多様な関係者との連携・協働、そして関係者のエンパワーメントの重要性も指摘されました。

次に、「実践活動からみる孤独・孤立支援の現状と今後の課題」と題したシンポジウムが開催されました。登壇者には、栗原栄里氏(松山市社会福祉協議会)、西田千紗氏(久万高原町役場・保健センター)、佐々木将史氏(久万高原町役場・地域包括支援センター)、田窪良子氏(特定非営利活動法人創作クラブ Grian)の 4 名をお迎えし、それぞれの実践報告を通じて、孤独・孤立の実態に関する活発な議論が交わされました。本シンポジウムは、高杉公人先生(新見公立大学)がコメンテーターを、村岡がコーディネーターを務め、実践知と学知の両面から孤独・孤立への理解を深める試みとなりました。そうして基調講演およびシンポジウム後には、フロアから多くの質問や感想が寄せられ、参加者の皆様の本テーマに対する関心の高さが示されました。最後に、自由研究発表では 4 つの分科会に分かれ、16 題の貴重な研究成果が発表されました。

本大会が、参加者の皆様にとって、実践者との活発な議論や交流を通じ、孤独・孤立という現代社会の課題に対する考察を深める機会となったのであれば幸いです。ご参加いただいた皆様、加えて大会の円滑な運営にご尽力いただいたすべての関係者の皆様に、心より感謝申し上げます。



Ⅲ. 中国・四国地域ブロック特別研究について（ご報告）

研究担当委員長 岩満賢次（岡山県立大学）

中国・四国地域ブロックの特別研究につきまして、2024 年度より「社会的養護の現状と今後一家庭養護への移行に伴って―」（研究代表者：杉原俊二会員（高知県立大学））を開始し、2025 年度も継続して進めているところでありますが、2025 年度には下記の通り 1 件の特別研究を新規に採択いたしました。中国・四国地域ブロックの社会福祉学の発展に向け取り組んでまいりますので、会員の皆様のご理解・ご協力のほど何卒宜しくお願い申し上げます。

記

- テーマ：重層的支援体制整備事業と連動した災害ケースマネジメント実践の現状と課題―中国・四国地方自治体におけるアウトリーチ・アセスメント・ケース会議の分析―
- 研究代表者：森本寛訓会員（川崎医療福祉大学）
- 研究分担者：岡正寛子会員（川崎医療福祉大学）、辻真美会員（高知県立大学）
- 研究の期間：2025 年 6 月～2026 年 3 月

以上

Ⅳ. リレーエッセイ

出会いと学び、しあわせな地域づくりをめざす「つながりミッケ」の活動紹介

渡辺秀美（益田市役所）

私は、島根県益田市という人口約 42,000 人の地域で自治体職員として仕事をしている。

今から約 5 年前の 2020 年、ある高校生からの相談をきっかけに、仕事の傍ら任意団体「つながりミッケ」を立ち上げた。今回はこの活動のあゆみについてご紹介したい。

当初、私に連絡をくれたのは、同い年の男性ケアマネジャー。彼とは日ごろから様々な地域課題について議論を交わすことがあり、お互いが所属する職能団体（ケアマネ協会）としても何かアクション出来ることはないかと言い合うこともしばしば。

そのような中、「ある高校生から相談を受けた。一緒に話を聞いてほしい。」と彼から連絡を受け、会う機会を設けることとなった。

その高校生は課題探究の一環として、地域の福祉に関する社会資源を調べる取組を行っていた。学校から出された課題は『社会資源を調べて、家族にプレゼンすること』だったそうだが、プレゼンしてみて思いついたことがあったという。それは、「今回の課題探究に取り組んでみて初めて介護保険サービスが地域にたくさんあることを知った。自分の祖母に紹介したが、祖母にとっては知らないことばかり。特に、ケアマネジャーという相談相手がいることも知らずもったいないと思った。自分の祖母のような高齢者に、もっと福祉について知ってもらい機会がつかれないだろうか？」というものだった。

そんなまっすぐな想いを聞いた私たちはとても嬉しくなり、是非その高校生の想いを形にしたいと一緒に計画を練ることとなった。

どうせなら多世代交流も同時に狙いたいという発想から、

- ・高齢者と高校生で体を使ったゲームをしながらクイズ形式で学ぶ場にしたらどうか？
- ・スマホ教室と題して、高齢者が社会資源を検索し、そのサポートを高校生が行うのはどうか？などなど。

そして2020年3月、開催に向け準備していた矢先に新型コロナの影響でイベントは中止に。一緒に準備してきた高校生も、大学進学とともに市外で生活することになり、その後何度かイベント開催を企画するも結局実現させることはできなかった。

最初は、高校生の想いを実現したいとの気持ちからイベント企画に携わっていたが、そのうち「私たちにも何かできるかもしれない。何か一つでもアクションしてみたい！」と、サポートから行動の主体へと意識が変化してきた。これが「つながりミッケ（以下、「ミッケ」という）」の活動の原点である。（何事もまずは自分の知らない世界とつながることから始まるのではないか。私たちが活動することで、新たなつながりが生まれ、それが良い出会いとなり、支え合える地域になればとの思いで命名）

「益田に住む人たちみんなが、しあわせに暮らせる地域をつくりたい。そのために自分たちができることを一つひとつ形にしていこう」と考え、活動をスタート。

まず取り掛かったのは、ミッケの活動のきっかけが高校生からだったこともあり、市内にある高等学校での授業にお邪魔することだった。幸いにも、福祉科を担当する教員とは工作上的なつながりがあったため、コロナの影響で校外実習ができないことから、ミッケの特別授業を受け入れていただくことに。（これはラッキーだった。）

将来介護福祉士や社会福祉士を目指す学生に対し、益田の医療福祉現場の実態や、資格取得後は益田で一緒に仕事をしよう！というメッセージも含め、講義に加えてゲームを取り入れた演習を行うなど、大人も楽しみながらの授業となった。

最初は2人だったミッケのメンバーも現在8人となり、中学生、高校生を対象としたイベント企画を継続している。

活動も6年目に突入し、時には助成金を活用しながらVR体験会の開催や講師を招いた研修会など、少しずつではあるが活動の幅を拓けている。

これからも、まずは自分たちが楽しみながら。

『つながりが人を育て、つながりが人を支え、つながりが社会を創る』を活動テーマに、小さな町で大きな夢を叶えたい。

V. 機関誌投稿原稿募集のお知らせ

日本社会福祉学会中国・四国地域ブロック機関誌
『中国・四国社会福祉研究』第14号
投稿原稿募集のお知らせ

現在、中国・四国地域ブロック機関誌（査読あり）は第14号の原稿を募集しています。

中国四国地方ならではの社会福祉の諸課題、社会福祉の実践活動を全国に発信してきたいと考えていますので、会員諸氏の積極的な投稿をお待ちしています。

投 稿 要 領 等

- 【執筆要領】 日本社会福祉学会機関誌『社会福祉学』の執筆要領に準じます。
・チェックリスト提出 ・図表含めて20,000字以内（A4 40字×40行 ワード作成）・3部提出 など
※投稿要領等の詳細は一般社団法人日本社会福祉学会HPの
【投稿要領・執筆要領】のページをご覧ください。
<https://www.jssw.jp/publication/journal/rules>

- 【原稿の種類】 「論文・実践報告・資料解題・調査報告」の中から選択して投稿可能です。

【原稿締切】

第14号 2026年2月27日（金）（2026年12月頃発刊予定）

積極的なご投稿をお待ちしております。

- 【原稿送付先】 〒718-8585 岡山県新見市西方1263-2 新見公立大学
高杉公人研究室 中国・四国地域ブロック機関誌編集委員会
事務局宛

その他、ご不明な点は本機関誌編集委員会まで、お問い合わせ下さい。なるべくメールでお問い合わせください。

編集委員会事務局 原稿送付先と同様

Tel: 0867-72-0634（呼出）
e-mail: kimiruhito@niimi-u.ac.jp